金沢龍馬會 会報
金沢龍馬会 事務局
２０２１年秋季号
通巻29号

《特報》

第33回龍馬 World in 高知大会

日 時：１０月３０日（土）１３:００～１７:１０
場 所：メイン会場　高知市文化プラザかるぽーと
当日スケジュール案

１３:１５　開会　　主催者挨拶
１３:３５　参加者龍馬会紹介
１４:００　基調講演
１５３５　パネルディスカッション
１７::００　次回開催地引継セレモニー
１７:００　大会メッセージ
１７:１０　閉会
１８:１０　交流会

１０月３１日（日）エクスカーション

【社中近畿北陸ブロック大会兼 陸奥宗光乃像 50 周年大会】

日時：８月２１日（土）和歌山で開催。

金沢龍馬会参加者：中城/朝日/吉田の３氏が参加。

ブロック大会は社中牧田副会長/坂本常任相談役、ブロック内から越前３名、大阪１名、兵庫１名、金沢３名、紀州５名、京都祇園４名、そしてブロック以外から長崎１名（兼九州ブロック理事）、青森２名、三河２名が参加しました。

牧田/坂本両名挨拶、本年３月に行われた社中役員総会の趣旨が説明されました。
そして参加各龍馬会からの活動報告が行われました。

その後、「陸奥宗光先生乃像」建立５０周年記念講演会、記念式典、親睦会と続きました。

陸奥宗光は神戸の海軍操練所、長崎の亀山社中・海援隊で一貫して龍馬と共にあり、第一弟子と言ってよい存在でした。龍馬なき維新以降は紆余曲折がありながら外務大臣として西洋列強との不平等条約改定に邁進し実現しました。外務省には宗光の像のみが存在するとのこと、新入職員は宗光精神を学ぶそうです。

和歌山は高知に於ける龍馬の如く、宗光が尊崇され、知事・市長・議会・国会議員が今大会に出席し宗光関連民間団体と連携しておりました。（なおブロックとしては令和６年の全国大会に和歌山が立候補することを承認しています）

志士たちが活躍した長崎とは　⑩

～江藤新平・副島種臣～

佐賀鍋島藩士江藤新平は幕末の志士のなかで、明治新政府にて活躍しながら、贅沢にも権力欲にも縁がなかった稀有な存在である。

佐賀の七賢人（鍋島直正、島義勇、佐野常民、副島種臣、大木喬任、江藤新平、大隈重信）で明治の十傑　＊（西郷隆盛、大久保利通、小松帯刀、木戸孝允(桂小五郎)、広沢実臣、大村益次郎、前原一誠、岩倉具視、江藤新平、横井小楠）といずれにも入る。七賢人は必ずしも志士ではない。

十傑は倒幕活動を行った志士の多くが夢半ばで倒れ去ったにもかかわらず、維新を超え活躍した代表的な人物たちである。

新平は龍馬と同じ年（文久２年）に脱藩し京都で桂小五郎達と交流する。数か月で帰郷するが重罪を免れた。藩主が彼の才能を評価していたためである。

長期間蟄居し慶応３年に許され藩務に付く。藩主は長崎に英語学校である致遠館を設立するが、研究者として大隈重信と共に江藤新平を指名する。
その頃、佐賀藩は薩長と結ぶことになり、戊辰戦争に参加する。
ここから新平の非凡な能力をいかんなく発揮することとなる。
江戸無血開城が決まると江戸城内部文章を接収し江戸の研究を行う。
江戸を東京とし遷都案を出した。
江戸の彰義隊を打ち負かせた。そして新政府のメンバーとして財政、会計、都市問題を担当する。その後、近代化に取り組み民法編纂に努力した。
更に司法制度の整備に努めた。つまり政府内で四民平等、学生制度、警察制度、司法制度などを整備し近代国家としての制度作りに貢献した。
しかし頭が切れすぎ、人情がないと思われたか、内務卿大久保利通と徹底して合わなかった。
岩倉使節団が洋行している間に留守役としていろいろやりすぎ、帰国後の大久保たちと議論となり、明治６年征韓論で政府が割れたため、西郷隆盛、板垣退助、後藤象二郎、副島種臣たちと同時に下野し帰郷してしまった。地元でリーダーとなった。
佐賀の乱が勃発した。政府の部隊と争い、有利な局面もあったが、結果的に敗北した。逃走するが土佐で捕まった。
そして江藤自身が確立した司法制度に基づき、裁かれ、明治７年 40 歳で処刑された。
同じく鍋島藩士の副島種臣も尊王攘夷運動に参加、兄の影響で藩校や京都で学び、長じて藩校で教授する。同時に長崎の致遠館督学の任に当たる。
そこで土佐藩士後藤象二郎と接触し、共に京都へ行き大政奉還を建白した。
鳥羽伏見の戦いの後、長崎では海援隊や各藩代表が奉行所を接収し長崎を管理した。長崎在住の各国領事の決定内容を報告するため、京都へ行ったところで、そのまま明治新政府の一員となる。
佐賀藩は軍事方面で新政府に貢献した関係で、副島は奥羽征討軍監となった。
新政府では薩長土肥出身の最高幹部の一人として活躍する。岩倉使節団の出発後は外務卿に就任し多方面で外交的処理にあたる。
明治６年の政変で江藤新平らと同様に下野する。江藤は佐賀に帰ったが、副島は東京に留まった。そして明治９年には中国へ渡り江南では上海・蘇州・杭州、北方は天津・北京、南方は湖南を巡った。満州や漢口（武漢）をも訪れ明治 11 年に帰国した。
その後は明治天皇に四書五経などを進講し、中断を挟み明治 19 年まで侍講した。
明治 21 年以降は枢密院顧問官となる。大久保利通とは住居が隣通しであることも関係し親しかった。日清・日露戦争後の明治 38 年 76 歳で逝去。
新平と種臣は同じ佐賀出身の秀才同士であり、長崎の致遠館にかかわったが、専制的力を保持した大久保利通との関係性で人生が大きく異なったようである。
ついでながら現代において佐賀人は「佐賀には、な～んにも、なか！」と自嘲気味に謙遜する。
しかし福岡と長崎に挟まれ、「佐賀人の通った後はペンペン草も生えない」とさげすまれながら福岡・長崎の繁華街で多くの土地を保有し裕福である。
また佐賀人の住居は立派である。更に普段ケチな割に教育と文化に力を入れ、恐るべきことに美術館・博物館・資料館など佐賀県立文化施設は入場無料である。全く独特である。

（＊諸説あり）

＜参考：長崎新聞、wikipedia＞

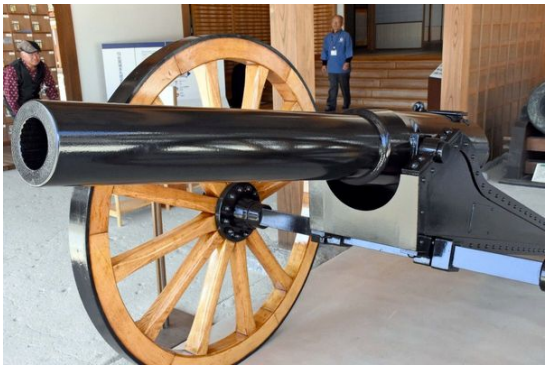

写真
佐賀新聞

佐賀藩のアームストロング砲。加賀藩江戸藩邸から上野に集結した彰義隊を砲撃し壊滅させた。

【編集後記】
皆さま、心の中に常に“龍馬の志し”を持ち張り切ってまいりましょう。会報も第２９号が完成、漸く皆さまにお届けすることが出来ました。

********** 事務局**********

金沢龍馬会

会　　長：蛭子政喜
事務局長：吉田信夫
080-5600-1113
jitianxinfu@hotmail.com

会報担当：中田俊郎 090-7806-2269
n-toshio@muj.biglobe.ne.jp

金沢龍馬会 公式ホームページ
http://kanazawa-ryomakai.com/

金沢龍馬会 facebook
https://www.facebook.com/kanazawa.ryomakai/